東京外国語大学オープンアカデミー教養講座

言葉とその周辺をきわめる

- 2 -

第１回
ドイツ語：音楽から見る言語―言語から見る音楽

藤縄 康弘
E-Mail: fujinawa@tufs.ac.jp
URL: http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/fujinawa/

ねらい

- ドイツ語は国内外を問わず学習者人口の多い、いわゆる「メジャー」な言語のひとつです。ドイツ語圏は、文芸、思想、科学、音楽、演劇など、文化の面で重要な位置を占めており、特に我が国では、こうした文化的側面への関心がこの言語を学習する動機となるケースが珍しくありません。そうした意味で、本講座においてドイツ語を取り上げるにあたっては、愛好者がことのほか多いと思われる音楽との関わりという視点からお話をしてみたいと思います。
- 音楽については、しばしばメロディ、リズム、ハーモニーがその三要素として挙げられますが、果たしてこれに相当する言語（ドイツ語）サイドの現象は何でしょう？ それらは実際、音楽の要素と何を共有し、どんな違いを持っているのでしょう？ そもそも、こうした言語と音楽との比較は、所詮、単なる喩えに過ぎないのでしょうか？ それとも言語（ドイツ語）の何か本質に触れる契機となるのでしょうか？

音楽の三要素

- メロディー（旋律）
- リズム（律動）
- ハーモニー（和声）

ドイツ語概観

- インド・ヨーロッパ語族のうちゲルマン語派に属する言語
- ゲルマン語は本来、語頭アクセント
  (1) *lat.* fen**e**stra　*dt.* F**e**nster　窓
- 今日、語頭アクセントの原則は失われてしまったが、...
  (2) *eng.* pr**o**blem　*dt.* Prob**l**em　問題
  elephant　Elef**a**nt　象
  st**u**dent　Stud**e**nt　学生
- 相変わらず語幹にアクセントを置くという性質は堅持
  (3) *lat.* **a**mō　*dt.* ich l**ie**be　私は愛する
  am**ā**mus　wir l**ie**ben　私たちは愛する
  amav**ī**mus　wir haben gel**ie**bt　私たちは愛した

ドイツ語概観

- 英語を除く現代ゲルマン語同様、定形動詞第２位
- 枠構造

(4)a. Alle Flüge fallen heute wegen des Unwetters aus.
すべての便が 本日 悪天候のため 欠航となります

b. Heute fallen alle Flüge wegen des Unwetters aus.
本日 すべての便が 悪天候のため 欠航となります

c. Wegen des Unwetters fallen heute alle Flüge aus.
悪天候のため 本日 すべての便が 欠航となります

- 副文（＝従属節）では定形動詞後置

(5) *wenn* alle Flüge heute wegen des Unwetters ausfallen
ならば すべての便が 本日 悪天候のため 欠航となる

ドイツ語のメロディー

- 文の種類に応じた文末イントネーション

(6)a. Karl muss am Sonntag zu Hause bleiben. (↘) 平叙文
カールは 日曜日 家に 居なければならない

b. Muss Karl am Sonntag zu Hause bleiben? (↗) 疑問文
カールは 日曜日 家に 居なければならない

- とはいえ、文末イントネーションのはたらきは限定的

(7)a. Karl hat das gesagt. (↗) 問い返しの疑問文
カールが そう 言った

b. Hat er das gesagt. (↘) 念押しの疑問文
彼が そう 言った

ドイツ語のメロディー

- 他方、文中の随意的なイントネーションはしばしば談話関係の明示に役立つ

(6')a.Karl (↗) muss am Sonntag zu Hause bleiben. (↘)
カールは 日曜日 家に 居なければならない

(7')a.Karl hat das gesagt? (↗)

b.Karl hat das gesagt. (↘)
カールが そう 言った

ドイツ語のリズム

- 「強（弱）」のアクセント・パターン

(8) ich l**ie**be 私は愛する
du l**ie**bst 君は愛する
er l**ie**bt 彼は愛する
…

(9) ich l**ä**chle 私は微笑む
du l**ä**chelst 君は微笑む
er l**ä**chelt 彼は微笑む
…

(10)

	単数	複数	
a.	der T**a**g	— die T**a**ge	日
	die H**a**nd	— die H**ä**nde	手
	das Pf**e**rd	— die Pf**e**rde	馬
b.	der V**o**gel	— die V**ö**gel	鳥
	die T**o**chter	— die T**ö**chter	娘
	das Gem**ä**lde	— die Gem**ä**lde	絵画

ドイツ語のリズム

- 「強（弱）」で終わるのが理想

(11)

	単数	複数	
a.	das Prob**l**em	die Prob**l**eme	問題
	der Ele**f**ant	die Ele**f**anten	象
	der Stud**e**nt	die Stud**e**nten	学生
b.	der Comp**u**ter	die Comp**u**ter	コンピュータ
	der Th**e**ma	die Th**e**men	テーマ
	das Rh**y**thmus	die Rh**y**thmen	リズム

ドイツ語のリズム

- 文のレベルでも「強（弱）」で終わるのが基本

(12) Alle Flüge fallen heute wegen des **U**nwetters aus. (= (4a))
すべての便が 本日 悪天候のため 欠航となります

Alle Flüge fallen h**eu**te wegen des Unwetters aus.
すべての便が 本日 悪天候のため 欠航となります

Alle Flüge fallen heute wegen des Unwetters aus.
すべての便が 本日 悪天候のため 欠航となります

(13) Wegen des Unwetters fallen heute **a**lle Flüge aus. (= (4c))
悪天候のため 本日 すべての便が 欠航となります

ドイツ語のハーモニー

- 精神の共鳴としての文

こう考えてくると、我々は、前に取り上げたときとは別の関連性においてではあるが、再び、概念の表示と、文（ザッツ）における思考の結合という問題に立ち帰ってゆくことになるのである。この二者は、内面的には思考を完成させ、外面的にはそれを理解させるという目的から自然に生じてくるものではある。ところが、この二者とはある程度まで無関係に、言語においては、同時に、芸術的な創造をしたいという基本的態度（プリンチープ）がおのずから生じてくるものであって、この態度は、本来、言語そのものに帰属するものなのである。〔何故、言語から芸術的なものが必然的に生じてくるかといえば〕、それは、言語においては、概念は音（テーネン）によって担われており、精神のさまざまな力が一斉に鳴り響くときは、音楽という要素が加わってくるからであり、しかもこの音楽的要素は、言語の中へ入り込んだからといって本来の性質を失うものではなく、ただ、ある程度変貌をとげるにすぎないからである。そういうわけで、言語の持つ芸術的な美しさは、言語がたまたま身にまとう装飾などという程度のものではなく、正にその反対に、言語の溢れんばかりに豊かな本質から生れる必然的な結果であり、また、言語が内面的・普遍的に完成しているか否かを見極める正真正銘の試金石なのである。

（フンボルト『言語と精神』亀山健吉訳、pp.156-157、丸カッコ表示は和訳本のルビ、角カッコは訳者による補足、下線 YF）

ドイツ語のハーモニー

(14) a. Ich habe jemanden fotografiert.
私は だれかを 撮影した

b. Jemand hat mich fotografiert.
だれかが 私を 撮影した

c. Mich hat jemand fotografiert.
?? 私は だれかが 撮影した

ドイツ語のハーモニー

(14') a. ich / 私は　　jemanden / だれかを

意味役割	動作主	>	被動者
談話関係	主題	>	焦点

(14') b. jemand / だれかが　　mich / 私を

意味役割	動作主	>	被動者
談話関係	焦点		焦点

(14') c. mich / 私は　　jemand / だれかが

意味役割	被動者	<	動作主
談話関係	主題	>	焦点

ドイツ語のハーモニー

(14) a. Ich habe jemanden fotografiert.
私は　だれかを　撮影した

b. Jemand hat mich fotografiert.
だれかが　私を　撮影した

c. Mich hat jemand fotografiert.
?? 私は　だれかが　撮影した
私**を**　だれかが　撮影**し**た
私**は**　だれかに　撮影**され**た

ドイツ語のハーモニー

(14') a. ich / 私は　　jemanden / だれかを

意味役割	動作主	>	被動者
談話関係	主題	>	焦点

(14') b. jemand / だれかが　　mich / 私を

意味役割	動作主	>	被動者
談話関係	焦点		焦点

(14') c. mich / 私は　　jemand / だれかが

意味役割	被動者	<	動作主
談話関係	主題	>	焦点

[ドイツ語の形式]

格	対格	<	主格
人称代名詞	1 人称		

ドイツ語の音楽性 — 中間まとめ

- メロディー　副次的
- リズム　関与的
- ハーモニー　関与的

音楽の本質

- ハーモニーは、安定感や「うちにいる」「よそにいる」といった感覚を、メロディーやリズム以上によく伝えます。調性音楽の中ではもっとも豊かな部分です。和音を変えなくても、リズムは何万と弾けますし、どんなメロディーも調性に基づく以上はハーモニーに依存します。ハーモニー、リズム、メロディーの三要素のうち、もっとも強力なのは、ハーモニーでしょう。
  （指揮者ダニエル·バレンボイムの発言、Roloff-Momin, Ulrich: *„Andere machten Geschichte, ich machte Musik.“ Die Lebensgeschichte des Dirigenten Kurt Sanderling in Gesprächen und Dokumenten,* Berlin: Parthas, 2002, p.318 から引用、翻訳 YF）
- 一般的に音楽を形成する三要素として、リズム、旋律、和声をあげる場合が多い。けれども、旋律をもたない音楽や、和声をもたない音楽は容易に考えうるのに対して、リズムをもたない音楽は考えられないという事実―リズムなしには音楽は生まれないという事実は、[…] リズムがより根源的な、生命と直接かかわりをもつ力であることを感じさせる。
  （芥川也寸志『音楽の基礎』東京：岩波書店、1971 年、87 頁）

言語とリズムの接点

- あらためてフンボルト

  こう考えてくると、我々は、前に取り上げたときとは別の関連性においてではあるが、再び、概念の表示と、文（ザッツ）における思考の結合という問題に立ち帰ってゆくことになるのである。この二者は、内面的には思考を完成させ、外面的にはそれを理解させるという目的から自然に生じてくるものではある。ところが、この二者とはある程度まで無関係に、言語においては、同時に、芸術的な創造をしたいという基本的態度（プリンチープ）がおのずから生じてくるものであって、この態度は、本来、言語そのものに帰属するものなのである。〔何故、言語から芸術的なものが必然的に生じてくるかといえば〕、それは、言語においては、概念は音（テーネン）によって担われており、精神のさまざまな力が一斉に鳴り響くときは、音楽という要素が加わってくるからであり、しかもこの音楽的要素は、言語の中へ入り込んだからといって本来の性質を失うものではなく、ただ、ある程度変貌をとげるにすぎないからである。そういうわけで、言語の持つ芸術的な美しさは、言語がたまたま身にまとう装飾などという程度のものではなく、正にその反対に、言語の溢れんばかりに豊かな本質から生れる必然的な結果であり、また、言語が内面的・普遍的に完成しているか否かを見極める正真正銘の試金石なのである。

  （フンボルト『言語と精神』亀山健吉訳、pp.156-157、丸カッコ表示は和訳本のルビ、角カッコは訳者による補足、下線 YF）

言語とリズムの接点

- リズムとは何か？ 単なる分節音の反復はリズムではない。分節音の反復の背後に「強・弱」「弱・強」「高・低」「低・高 」などの周期的な交替が聞き取られるところに、つまり隣接する二音が群として捕捉されるところにリズムが生まれる。リズムは、異なる価値をひとつのまとまりとなすこころのはたらきにほかならない。
  （参照：クラーゲス『リズムの本質』1971 年、みすず書房）
- 言語は思考や感情に形を与えること。そこでは複数の異なる概念や知覚がひとつの判断・感覚の下にまとめられる。
- このような異質なものの統合に言語とリズムの接点がある。

リズムの基層性

- 国語学からの視点

  私はリズムを言語に於ける場面であると考へた。しかも私はリズムを言語に於ける最も源本的な場面であると考へたのである。源本的とは、言語はこのリズム的場面に於いての實現を外にして實現すべき場所を見出すことが出來ないといふことである。〔中略〕かく考へて來る時、音聲の表出があつて、そこにリズムが成立するのでなく、リズム的場面があつて、音聲が表出されるといふことになる。

  （時枝誠記『國語學言論』東京：岩波書店、1941 年、156-157 頁；傍点原著者）

リズムの基層性

- 文化人類学からの視点

  文化のなかには変わりやすい部分と、変わりにくい部分がある、それは確かだ。しかし、どういう部分が変わりにくく、それはなぜなのか、また、変わりにくい部分は変わりやすい部分とどのような関係になるのかを見極めることは、きわめてむずかしい。文化人類学の研究は、たとえ通時的変化に係わるものであっても、多かれ少なかれ文化の持続性を前提としていると言えるだろう。

  私は西アフリカの研究をしていて、西アフリカの人々と私たち日本人の、リズム感の違いに驚かされる。そして、リズムというのは、人間の発話行為や音楽や、多少とも条件づけられた身体の動かし方（ボアズはいみじくもこれを、“mother habits” と呼んでいる）、つまり身体技法や、人と人の交わり方など以前の、それらのものをむしろ深層にあって条件づけている、きわめて変化しにくいもののように思えてならない。

  （川田順造『西の風・南の風』東京：河出書房新社、1992 年、204-205 頁）

まとめ

- 言語の音楽性はリズムに根ざす
- リズムの本質が言語の本質と通底する
- この基盤の上に概念のハーモニーが生まれる